

韓国西海地域におけるマウル信仰研究

——京畿道と忠清南道を中心に——

A Study of Folk Belief for Village Featured on the Western Coast of South Korea

In the cases of Gyeonggi-do and Chungcheongnam-do

李 徳雨

LEE Doc-woo

要 旨

マウル（村）信仰は、自然村あるいは行政村の構成員達が供物を準備し、日程を定めて神々に村や家庭の安寧を祈願する韓国における信仰形態の一つである。現在、マウル信仰は、いくつかの要因により、衰退の傾向が見られる。

マウル信仰の継承力が徐々に弱り始めているという時点で、マウル信仰に関する研究は、消えてゆく民俗文化の保存と伝承を問題にする研究にとって必要不可欠なものとなっている。本研究では、韓国西海沿岸部の広い地域を対象として、その地理的、環境的、経済的な要素がマウル信仰にどのような影響を及ぼすのか、また、マウル信仰がどのように伝承されていくのかについて考えてみたい。マウル信仰の原形を把握することは難しい。そして、マウル信仰の伝承様相を明らかにするためには、調査地域の通時的な観察が必要であり、村の歴史・構造・人々の生活とその変化、文化的な要素などを総合的に分析しなければならない。

また、西海沿岸部地域に見られるマウル信仰の実際のあり方からいくつかの類型を導き出して、その特徴を民俗学的な視点から考察した。そのために、^{キョンギドキンポシデコツミョン}京畿道金浦市大串面の^{デミョンブンオジェ}大明豊漁祭、^{キョンキドファソンシソンサンミョン}京畿道華城市松山面の^{ウムドダンジェ}牛音島堂祭、^{チュンチョンナムドタンジンガンソンアクミョンゴデリ}忠清南道唐津郡松岳面古垓里の^{フンオ}ンソム豊漁クツ、^{チュンチョンナムドテアングンアンミョンウプファンドリ}忠清南道泰安郡安眠邑黄島里の^{フンギブンオジェ}鵬旗豊漁祭、^{チュンチョンナムドホリョンシオ}忠清南道保寧市鰲^{チュンミョン}川面の^{ヒョジャドダンジェ}孝子島堂祭など、5つの地域のマウル信仰の現地調査をした。

韓国の西海地域に見られるマウル信仰の特徴は、①イシモチ漁に関連する神、②キリスト教の流入による伝承の断絶、③マウル信仰から個人信仰につながる信仰、④儒教と巫俗の習合、⑤豊漁ということばの意味の弱化であると考えられる。

【キーワード】 マウル（村）信仰（^{マウルシンヤン}마을 신앙）、西海地域、豊漁祭、堂祭、伝承と変化

1. はじめに

マウル信仰⁽¹⁾は、直訳すると「村の信仰」であり、村の構成員達が村において供物を準備し、日程を定めて神々に村や家庭の安寧を祈願する信仰形態の総称である。この場合の「村」^{マウル}とは、自然村を指すことも、行政村を指すこともある。韓国の民俗学においては、マウル信仰をマウル(村)祭、洞祭、洞神祭、部落祭、集団信仰などの名称のもとに研究している。またマウル信仰は、韓国各地に広く分布しており、ソウルの府君堂祭^{フグンダンジェ}、京畿道の都堂祭^{ドダンジェ}、嶺南のゴルメギ祭^{ドンシン}・洞神祭^{ドンシン}、湖南の堂山祭^{ダンサンジェ}、江原道の城隍祭^{ソナンジェ}、済州島の醮祭^{ホジェ}など、地域によって異なる名称で呼ばれている。本論では、「マウル信仰」という言葉でこうした村の信仰を総称し、様々な形で現れる各地の信仰形態を分析するための概念として用いることにする。

マウル信仰に関する韓国での研究動向を見ると、民間信仰というカテゴリーの中で、巫俗と共に重要な研究対象とされていることがわかる⁽²⁾。マウル信仰を研究することの必要性について韓国民俗学では、次のように言及されている。民俗学は、民衆の生活を体系的に研究する学問であり、そのために、その基盤としての「마을(村)」^{マウル}という場所、そして人々によって組織される「共同体」の構造について研究することが重要である。つまり、「マウル」という「共同体」をよく映し出すものがマウル信仰である。また、マウル信仰は、共同体の結束力を強化するメカニズムとして作用する力をもつ。そのために、民俗学では、長い間、マウル信仰を主な研究対象として研究してきたのである⁽³⁾。しかし、現在のマウル信仰には、いくつかの要因により、衰退の傾向が見られる。実際、筆者も忠清南道の青陽で調査をする中で、情報提供者から、今年マウル信仰の伝承が途絶えたということを知ることがあった。村に不浄があるために、マウル信仰が行われる期日を延期する場合などと異なり、マウル信仰の実施自体を完全に中止することが、村の会議によって決定されたという。ここから、マウルがもっていた継承力が弱まったことが分かる。消えてゆく民俗文化の保存と伝承を問題にする研究にとってマウル信仰に関する研究は、必要不可欠なものとなっている。

本研究が対象とするのは、韓国の西海沿岸部と島嶼^{とうしょ}一帯のマウル信仰である。西海は中国東部沿岸と朝鮮半島の間にある海で、黄海とも呼ばれる⁽⁴⁾。総面積40万4,000km²、南北の長さ1,000km、東西の長さ700kmであり、水深は20~80m程度、最大水深103m、平均水深44mの海である。また、西海は潮の干満の差が大きく、仁川では8mに達する。また全体的に浅い海で、底引き網でイシモチ、レンコダイ、タチウオなどを獲るためのよい漁場となっている。このような地理的、環境的、経済的な要素は、マウル信仰にどのような影響を与えてきたのだろうか。

これまでのマウル信仰に関する研究は、信仰の対象が何であるか、それに付随する神話の内容、信仰の構造、信仰の機能などが主流となっていた⁽⁵⁾。また、報告書の内容も一つの地域に限定されるか、全体的な民俗調査の中の一つの分野と見なされて、表層的に研究されてきたという傾向がある。このような問題を克服するために、本研究では、前述した西海沿岸部の広い地域を対象として、その地理的、環境的、経済的な要素がマウル信仰にどのような影響を及ぼしてきたか、また、マウル信仰がどのように伝承されていくのかについて考えてみたい。また、西海沿岸部地域に見られるマウル信仰の実際のあり方からいくつかの類型を導き出して、その特徴を民俗学的な視点から考察してみることにする。

2. 先行研究の検討

1) 報告書

西海沿岸部におけるマウル信仰に関する研究は、大きく報告書と論文とに二分することができる。報告書では『韓国民俗総合調査報告書—豊漁祭篇』において、「西海岸の豊漁祭は、東・南海岸よりも盛大に行われ、漁撈信仰ぎよろうとしての性格が大きな割合を占めている。」⁽⁶⁾とされ、村の現況、堂に関する由来、祭祀の方法（日時、場所、堂神の種類、祭祀にかかる費用の内訳、供物、祭祀過程）などの項目について調査の内容が記されている。このほかに、「西海岸の豊漁祭は、堂祭と堂クツという名で呼ばれることもある。ここでの堂祭は、洞祭と区別して、特別な目的のために行うものを意味する。特に、島嶼地域では、堂祭という名称が多く用いられているが、これは豊漁所願の意味を強く持っているといえる。」⁽⁷⁾とも述べられている。さらにこの報告書では、西海沿岸部各地で行われる豊漁祭を、共同祭祀と個人祭祀とに分類している。その中では、共同祭祀の事例として、全羅北道のチョルラプクト高 徹 郡海 里 面 東湖 理のミョンドンホリ霊神クツと水陸祭、全羅北道のスリュクジュ扶安郡フアングンウイド蝸島のフアンティベンノリ（茅船送り）、西海岸大同クツが調査されている。

『韓国の村の祭堂』は、行政村を対象に、祭堂の名称、堂の形態、堂の神格、祭官の名称、祭祀の形式、祭祀の回数、祭祀日、祭祀の時間、祭祀にかかる費用といった項目について調査したものである。この中で西海岸地域からは、京畿道、忠清南道、全羅北道、全羅南道が調査の対象として選ばれている。このうち、京畿道では全部で22の行政区域の中から、カンファ江華、オンジン金浦、インチョン甕津、仁川、華城など5つの地域が選ばれ、忠清南道からは、唐津、保寧、瑞山、洪城など4つの地域で調査が行われた⁽⁸⁾。この報告書は、各行政村に対して、アンケート形式で調査した結果を整理したものである。この中では、全国各地域の状況を見ることができるが、行政区域上のアンケートを通じた調査であるので、決められた質問に回答したという場合が多く、詳細な現状を知ることが難しい面がある。

『漁村の民俗誌』⁽⁹⁾は、京畿道と忠清南道の漁村民俗について調査した報告書で、調査地の概要、漁業と漁撈技術、漁村契（漁業協同組合）の組織と活動、漁撈信仰、説話、民謡といった項目についての調査報告書である。この中でマウル信仰に関しては、漁撈信仰の項目の中で調査され、韓国国立民俗博物館の「伝統生活史の圏域別（特定の範囲内での地域）の学術調査」の一環として行われた。そして「消えつつある民俗現象に関する記録化事業」という目的のもと、マウル信仰がどのように変化してきたかについて注目した報告書である。

『島嶼誌』は、宗教文化の分野の中でマウル信仰を取り上げている。この報告書では、外煙島をはじめとする合計15ヶ所の忠清南道島嶼地域のマウル信仰について調査している⁽¹⁰⁾。そして、マウル信仰の名称に関しては、主に「堂祭」という名称が多く用いられると指摘し、各島嶼別に祭祀の由来を記している。このほか、祭堂、祭祀準備、進行過程などの項目について調査し、堂祭の構造と性格を把握しようとしている。直接現地調査を行った結果に基づいて出されたこの報告書は、古文書についても調査を行った点と、行くことが難しい島嶼地域について調査したという点で、韓国民俗学界でも高い評価を得ている。

『韓国の海洋文化』⁽¹¹⁾は、韓国海洋の全体的な海洋生活史と文化資源について海洋水産部が調査した結果をまとめた報告書である。マウル信仰に関する内容は、海洋儀礼として記述されており、そのうち「西海海域（下）」篇では、京畿道篇と忠清道篇に分けて報告されている。京畿道篇では、京畿道海域を①バジュ金浦・坡州・江華圏海域、②仁川・甕津圏海域、③シフン始興・アンサン安山圏海域、④華城

圏海域という、4つの圏域に分けて、標本調査を行っている。忠清道篇では、西海沿岸部の6つの市・郡の中から唐津郡、瑞山市、泰安郡、洪城郡、保寧市、舒川郡^{ソチョン}という地域を選び出し、さらにそれぞれの市や郡の中から1つの地域を選択し、集中的に調査を行っている。それ以外の地域では、堂祭の状況について、その伝承の有無を報告するという形でまとめられている。京畿道篇と忠清道篇の内容には、祭祀の名称、堂の名称と形態、祭祀の日、祭主、供物、祭祀にかかる費用、祭祀の過程、祭祀の消滅と変容などが含まれる。特に祭祀の消滅と変容に関して調査した点は、マウル信仰の過去から現在までの伝承過程を知る上で重要な項目である。

2) 論文

一方、西海沿岸部と島嶼地域に行われるマウル信仰についての論文は、次のように整理することができる。まず河孝吉^{ハヒョギル}は村の堂祭を「儒教式形態」と「クッノリ(クッ遊び)形態」に区分して、「クッノリ形態」をさらに「巫クッ形態」と「農楽形態」に分類した⁽¹²⁾。そして形態別に祭祀の方法、祭堂、祭神、祭祀の空間、祭祀過程別に分け、それぞれの特徴、祭祀の参加権などの項目について調査・分析した。その中で、西海沿岸部と島嶼地域では、マウル信仰が行われた後の、船告祀^{ベッコサ}(これは個人の信仰として分類できる)について、他の地域との相違点を次のように述べている。東海岸と南海岸では、船に5色の城隍旗^{ソナン}を1つずつ飾っているが、西海岸では少なくともそれを2つ以上飾る。多い場合には、7～8つもの城隍旗を飾っているので、それを揚げた船が集まると素晴らしい風景であるという。さらに、船告祀は船主がおこなう個人の祭祀でありながら、一方で、村の人々も参加するため、まるで村の共同祭祀であるかのような錯覚を起こさせると述べた。また東海岸の船告祀は単に儀礼的な祭祀であり、南海岸の船告祀は深い信仰性が現れるような祭祀であり、西海岸では信仰性に祝祭性が加わると主張した⁽¹³⁾。

薛盛璟^{ソルソンギョン}は、西海岸の漁業民俗には地域的な特徴が強く残っており、その代表的な例は林慶業將軍^{イムギョンオプ}(1594～1646)が神格化されたことであるとして、関連する説話を挙げながら主張した⁽¹⁴⁾。この点に関して朱剛玄^{ジュガンヒョン}は、西海地域の漁業習俗の特徴を明らかにするため、「イシモチ漁」という生産活動を前提とし、これと関連して林慶業將軍を生産神とする神格化問題について論じた⁽¹⁵⁾。ここでは、林慶業將軍という人物が漁業にとって重要な信仰対象になっただけではなく、地域の住民の風習と関連しながら、西海地域において神格化されてきたと主張した。

金宗大^{キムジョンデ}は忠清南道海岸地方の堂祭を調査し、マウル信仰について、農楽とクッを組み合わせたものであるとし、堂主と化主に選出された人のみで堂祭が行われていることを指摘した⁽¹⁶⁾。

既存の西海沿岸部と島嶼地域のマウル信仰の研究は、消えつつあるマウル信仰が直面している危機についての報告として、大きな意義を持っている。しかし、対象とする地域が沿岸部にほぼ限定されている報告では、島嶼地域との関係、地域の特殊性を明らかにすることができていないといえる。そのため本稿では、西海沿岸部と島嶼地域を含めて、「西海地域」という用語を使う。そして西海地域におけるマウル信仰に焦点をあてることで、その特徴について考察してみたい。周知のように、西海は東海、南海とは異なり、潮の干満の差が大きく、これによって干拓地が多いという特徴がみえる。さらに七山漁場^{チルサン}から大和島漁場^{デファド}までを含む西海全地域はイシモチの獲れる良好な漁場でもある。このような地域的、環境的、経済的な特徴が、どのようにマウル信仰に影響を及ぼしているのか、その特徴を調べるのが本稿の目的である。

3. 西海地域のマウル信仰のあり方

本章では、筆者が西海地域のマウル信仰について行った調査をもとに、西海地域の沿岸と島嶼におけるマウル信仰のあり方について検討する。調査地域は、京畿道金浦市大串面の大明豊漁祭（경기도 김포시 대곶면 대명풍어제）、京畿道華城市松山面の牛音島堂祭（경기도 화성시 송산면 우음도당제）、忠清南道唐津郡松岳面古垈里のアンソム豊漁クツ（충청남도 당진군 송악면 고대리 안섬 풍어굿）、忠清南道泰安郡安眠邑黄島里の鵬旗豊漁祭（충청남도 태안군 안면읍 황도봉기풍어제）、忠清南道保寧市鰲川面の孝子島堂祭（충청남도 보령시 오천면 효자도 당제）の合計5つのマウル信仰である（図1）。調査項目は、地域の概況、マウル信仰の由来、名称、堂、時期、過程などである。もちろん、この調査で西海全域のマウル信仰のあり方を知ることにはできないが、現在伝承が残っている地域の分析として価値があると考えられる。

1) 京畿道金浦市大串面の大明豊漁祭

金浦市大串面の大明里（대명리）

は、江華島の海岸に位置する村で、現在、約70世帯で180人が住んでいる。中国の夏の第2代皇帝である明昇が降伏した後、母後の彭氏と一緒に亡命してきたのが大明里で、大国の明王が亡命して住んでいたという伝説から「大明村」と呼ぶようになったのが今の大明里の由来であるという。大明港という名前で有名になった大明里は、鶴儀・沙來・寒井・高棧という

自然村が大明1里から4里まで点在する。現在の豊漁祭は大明3里で（寒井マウル）で行われている。

この豊漁祭は大同クツもしくは堂神祭とも呼ばれ、漁村契（韓国の漁業従事者で構成される組織）と婦人会が中心になって祭祀の準備をする。豊漁祭の日には、旧暦正月十日から十五日の間において、村の住民達が決めて行っていた。しかし、現在は金錦花⁽¹⁷⁾というムーダン（巫堂・巫女）と相談して、日にちを決めている。豊漁祭の場所は村の港で執り行うが、その時に神は村の堂山木（神木）から連れてくる。その堂山木の前にはトジュガリ（터주가리、壺に藁を包んで神を祭るもの。写真1）を設置し、その周りに白い紙を付けたしめ縄を張っておく。堂としての形態をもたないが、村の住民は堂もしくは堂木と呼んでいる。

豊漁祭は、日が昇る前にムーダンと住民が供物を持って堂

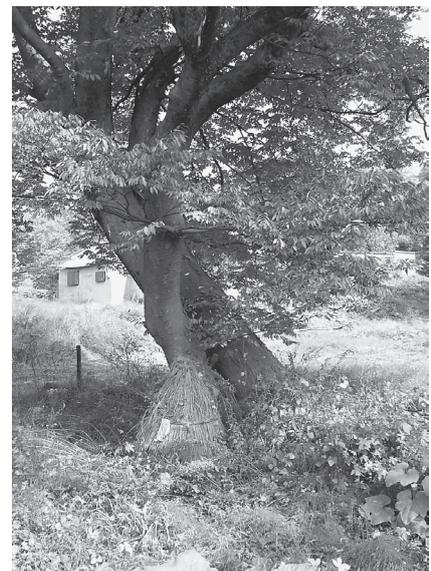
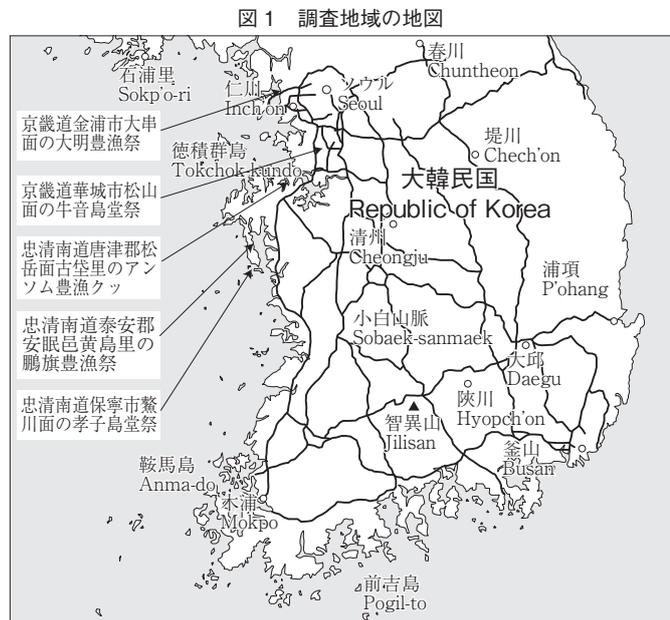


写真1 堂山木とトジュガリ



写真2 大明豊漁祭のクッ庁

山に登るところからはじまる。前述したように祭堂がないため、堂山木の前でクツを行うが、これを「堂山迎え」という。そして山から下りて、港につくられたクツ庁（クツの準備からすべてのクツを行う場所。写真2）で、人々の命と福を管掌する七星神を迎えるクツ（七星迎え）を行う。次はクツ庁の不浄を洗って清潔にするチョ不浄クツを行う。そして住民だけではなく参加している人々に福を与え、船を守ってくれることを祈願する帝釈クツをする。その後、赤、白、青、黄、緑の五色の五方神将旗の中から

1つを引く占いを行う。それから「サスル立て」という儀礼で供物の豚を丸1頭、三枝槍に刺して立てる。この時、供物が倒れなければ神がお願いを聞いてくれると考えられている。最後に豊漁祭に参加した漁民や一般の人々が供物の酒を飲む「福盞ネリム」を行う。これは神から福を頂き、その福が体に入ってくると信じてのことである。

2) 京畿道華城市松山面の牛音島堂祭

京畿道華城市松山面に属する牛音島（우음도）は、安山市から海を隔てて約2.4 km 離れており、華城市の陸地からは約2 km 離れている地域である。牛音島里では、三国時代の土器彫刻が発掘されたり、村の入口には恐竜の化石に触れる体験場もある。この牛音島の面積は0.42 km²で、海岸線の長さは2.4 km で、2つの峰に囲まれている村である。この島に人が住み始めた時期は不明であるが、坡平尹氏が最初に住み始めたかと伝えられている。牛音島という地名の由来については、島の形が牝牛と雄牛2頭が横になっている姿に見えるということ、また牛の鳴き声がたくさん聞こえたなどの由来も伝えられている。村の人口は、現在170名くらいであると戸籍上に報告されているが、実際には約70名程度である。情報提供者によると、以前、海産物が豊富に獲れた時には今よりも人口が多かったが、近年は漁獲量も減少し、陸地まで橋が架かったため都会に住みながら時折島に帰ってくる住民が増えたという。

牛音島の祭堂は、本堂・閻氏堂・軍雄堂の3つがあったが、現在は本堂しか残っていない。本堂は村の堂山の頂上に位置し、広さは約3坪程度で、長さは横4.5 m、縦2 m でコンクリート製の壁とスレート屋根で建てられた一軒の建物である。

以前の本堂では、祖父（ハラボジ）1人、妻（ブイン）2人、馬子2人、侍女1人の計6人の神像が描かれていた。現在では都堂ハラボジ、都堂ハルモニ（祖母）、竜王様、金傳大王様⁽¹⁸⁾、馬子、大神ハルモニ、安氏夫人、洪氏夫人、馬子と書かれた位牌が貼ってあり、都堂ハラボジ、都堂ハルモニ（祖母）、馬子・大神ハルモニ、安氏夫人、洪氏夫人は絵も一緒に貼ってある（写真3）。

閻氏堂は、牛音島から沖合に3 km の距離に位置する干潮時にのみあらわれる岩である。この閻氏堂に関する伝説によると、昔、仲の良い夫婦がいて、漁に出た夫の帰りを妻が岩で待っていたが、潮が満ちてきたために亡くなってしまった。その後、村の住民がその妻の魂を慰めるために、その岩を閻氏堂と呼び、毎年正月に祭祀を行うようになったと伝えられている。そして軍雄堂の跡地は村の船着場にある堂木の隣に残っている。

以前は旧暦2月初めに住民が集まって堂主を選出し、堂祭の準備をしたが、現在は「牛音島生計対策委員会」が中心になって、その中から堂主を選出している。また昔は毎年3日間堂祭が行

われたが、今は3年ごとに、旧暦2月に1日だけ行われている。このように多少の変化があるが、ムーダンを連れてきて、クツを行うことは変わっていない。その順番は、「村クツ→ナラックブリ堂・ウェガル堂（閻氏堂）クツ→個人井戸告祀→大同井戸告祀（写真4）→小堂クツ→軍雄堂祭（12ゴリクツ）→本堂祭」である。以前は2日かけて、軍雄堂祭と本堂祭は夜中まで行われたが、現在は朝8時から夜9時までしか行われない。また「牛音島堂祭」という名称も現在「牛音島生命希望堂祭」という名称に変わった。この背景には社会的な問題と住民の間の葛藤を解消しようとする動きがある。牛音島の近くに始華湖という人工湖ができてから干涸がなくなり、住民間で賠償問題が発生した。そのため、村の共同体的な雰囲気復活に役立てようと堂祭の名称を変えたのである。



写真3 堂に貼ってある神像



写真4 大同井戸告祀

3) 忠清南道唐津郡松岳面古垓里のアンソム豊漁クツ

忠清南道唐津郡松岳面古垓里は、アンソム（안섬、内島の訓読み）マウル、あるいは内島^{ネドリ}と呼ばれていたが、1950年代の行政区域名として古垓里になった。アンソムマウルのアンソムという地名の由来については、二つの説が伝わっている。まずマウルが島であり、水に囲まれているので、アンソムになったという説がある。もうひとつは、この島に初めて住んだのがアニョジャ（内の女性）で、アニョジャをアネ（妻の韓国語の発音）とも呼んだため、アネの古語であるアンへのアンという文字を用いてアンソムになったという説がある。

アンソムのマウル信仰の名称は、現在豊漁クツ、あるいは豊漁祭であるが、本来は堂迎え、堂祭、城隍（ソナン）迎えなどと呼んでいた。またその堂の神が蛇（あるいは龍）なのでジンテ（蛇の方言）ハラボジ迎えともいう。

豊漁クツは、毎年旧暦正月最初の辰の日に堂山の堂、村の入口の城隍、村の中の井戸などの3ヶ所で執り行う。現在の堂の中には、小堂（閻氏。写真5）・本堂（龍神）・次堂（將軍）という名前が書かれている3つの部屋がある。また豊漁クツは大祭と小祭で分けられ、大祭は5年に1回（三昼夜）、それ以外は小祭（一昼夜）を執り行う。

豊漁クツの進行過程は、大晦日に村の住民達が集まって、堂主を決めることから始まる。この堂主を決めるときは、村で一番不浄がない人を選出し、かつその妻に月の障りがないかも確認する。また堂主に選出されると潔斎をし、夫婦関係や、豚肉を食べることも禁じられる。豚肉を禁じるのは、豊漁クツの神が蛇で豚と相克関係にあるといわれているためである。また堂主の家の前には、しめ縄を張り、黄土を盛る。



写真5 閻氏堂



写真6 船告祀

豊漁クツの当日には堂主、ムーダン、^{ブンムル}風物隊（農楽隊）、村の住民が船旗を持って堂山に登る。堂に着いたら供物を供えてクツが始まる。クツの順番は、「不浄クツ→大同クツ→魚網クツ（漁船クツ）→旗クツ→米の占い」の順で次の日の夜明けまで執り行われる。二日目の朝、堂主は堂の供物を持ってくる。この供物は各船主に配られて、各船の船告祀（写真6）に使用する。またムーダンは船旗に向けてゴンス（ムーダンの託宣）を行う。この行為を船主は「神様を頂く」という。船主はゴンスを授かると船旗を持って自分の船に走っていくが、これは一番早く着いた人がたくさんの魚を獲ると信じられているためである。船に着くと、持ってきた供物で船告祀を執り行う。船告祀が終わると、「魚がいっぱい獲れるように……」と呪文を唱えながら、その供物を海に投じる。

このアンソム豊漁クツは、2001年忠清南道無形文化財第35号に指定された。市や文化財庁からの援助を受けて伝授会館も建てられ、毎年、豊漁クツの時にはたくさんの観光客が訪れている。外部の人の流入により、村の雰囲気も少々観光化されて、村民の自発的な参加が少なくなったという心配の声も聞こえている。

4) 忠清南道泰安郡安眠邑^{ファンド}黄島里の鵬旗豊漁祭

忠清南道泰安郡安眠邑の黄島（^{ファンド}황도）は、安眠島の東側に位置している島で、麦が熟すと黄色に見えることから黄島という地名がつけられた。黄島に人が住み始めたのは約200年前で大田からニシン漁をするために移住してきたのが最初であるといわれている。本来の黄島は陸地と離れており、船でないと黄島に入ることが出来なかった。しかし1977年の全国民俗芸術競演大会で大統領賞を受賞し、その援助金で1982年に橋を掛け、今は車両通行が出来るようになった。

黄島鵬旗豊漁祭は毎年旧暦1月2日から3日まで、ムーダンが主管してほとんどの過程を執り行っている。黄島鵬旗豊漁祭に関する由来は三つに分かれる。まず、村の入口に立てられている案内板の内容をみると、昔、深い霧に包まれた暗い夜に出漁した漁船が航路を見失って漂流した。その際、今の堂山（祭堂があるところ）からの光が帰路を照らして皆が無事に帰還した。この時から住民たちは自分たちを助けてくれた神聖な場所として、この地に堂を建てて祭祀を執り行うようになったという説である。二番目は祭堂の前に建てられた「鵬旗豊漁祭由来碑石」に書かれている内容である。上記の案内板の内容だけでなく、元来は蛇の神を祀ってきたものだが、17世紀末から林慶業將軍を祀るようになり、漁業の発達によってより多くの神の加護を得るために他の神も祀ったという説である。三番目は、この村の入島主である羅州鄭氏と海州呉氏がそれぞれの祭堂を建てて祭祀を執り行ってきたが、鄭氏の堂だけ残り、それを改築したものが現存のものだという説である。

今の堂は、村の山の上峰と下峰の間に位置している。堂は計3棟の建物があり、12年前に改築した。堂を改築する以前には、赤い瓦にコンクリートの壁で造った堂であったが、今は黒い瓦に変わった。堂の周りにはエンジュの木が群をなしており、堂の前には鵬旗豊漁祭由来碑石が建てられている。堂の内部には5柱の神の絵が描かれているが、本来は城隍様（ソナンニム）が白い服を着ている絵であった。この絵は日帝強占期に燃やされたという。

今は黄島のマウル信仰を豊漁祭と呼んでいるが、過去には山神祭、堂クツ、都堂クツなど、その名称が多様であった。そして祀っている神は、由来碑によると林慶業將軍であると書かれている



写真7 堂と鵬旗



写真8 不浄クツ

が、これは黄島に新しいムーダンが入ってきてからそのようになったと思われる（写真7）。村の古老の話によると、1983年に金錦花氏がかかわるようになって、そのクツの形式が黄海道クツになり、城隍様を祀らなくなったという。

現在の豊漁祭の次第は、旧暦1月2日に祭場をきれいにする不浄クツ（写真8）、^{ビゴサ}血告祀（屠畜した牛から得られる牛の血を供物とする祭祀）、^{ギルチ}セギョンクツ（家ごとに福を祈る）をし、^{ベッコサ}吉紙（良いことをもたらす紙）を貰う。そしてその紙を船主が自分の船に持って行って、船告祀をする。それから堂では、金錦花氏が中心となって夜明けまで本クツ（堂クツ）を執り行う。次の日、住民に配った残りの供物を海に撒く罷祭が執り行われる。

5) 忠清南道保寧市鰲川面の孝子島堂祭

忠清南道保寧市鰲川面にある孝子島（효자도）は、元々は^{ソジャミ}小慈味と呼ばれていた島であったが、昔から孝行な子がたくさんいたので孝子島と呼ぶようになったという。孝子島の人口は、2008年調査当時72世帯で150人程度が住んでいたが、その中で漁業をしているのは40世帯で、農業と兼業している世帯の方が多かった。

孝子島の堂祭は、村の安寧と平和のために執り行われる。いつから堂祭が行われたかは、正確に知られていないが、堂の天井に「己亥年」と書いてあり、村の古老の話によると1899年以前から堂祭が執り行われていたといわれる。現存する堂は上堂で、本来は下堂もあった。上堂は村の堂山頂上に位置している（写真9）。下堂は村の会館の横にあったが、20年前に住民が会議を行ったうえで撤去したという。堂山の上堂は約5坪程度の面積で、堂に入ると、向って正面の壁だけがコンクリートでつくられており、他はすべてが木壁である（写真10）。堂の入口から向って右側の壁の上部に棚があり、棚の上にはナイロン紐に赤、黄、白の布が掛けられてある。その布には、左から將軍堂、閣氏堂、本堂、水夫堂という文字がハンゲルで書いてある。このように文字が書いてある理由は、若い人々に堂祭の神を覚えさせるためだという。孝子島堂祭は堂山で執り行っているため、山神祭とも呼ばれている。堂祭は旧暦正月14日の夜8時頃から始まって、11時頃に終わる。下堂がなくなる前までは、上堂祭→下堂祭→井戸祭→チャンスン祭の順で執り行われたが、今は上堂祭の終了後、その供物を船着場で住民たちが一緒に食べることで祭祀が終わるといふ。上堂祭か



写真9 上堂 (外部)



写真10 上堂 (内部)

らチャンスン祭まで行っていた時は、堂主の選出から供物の準備に至るまで、禁忌とされることがたくさんあった。たとえば、不浄ではない堂主を選出したり、風物隊が堂祭費用を集めたり、供物の牛を購入するために船で陸地まで行って交尾していないものを選んだりした。60年前までは、この村にムーダンの夫婦が住んでいて堂祭を主管したが、今は村の住民のみで堂祭を執り行っている。

4. 西海地域のマウル信仰の類型

マウル信仰からその地域の特性を見ることができる。また、地理的環境や、生態的な特徴によっても、その類型が異なるともいえる。今までのマウル信仰の類型分類の研究は、信仰対象によってなされるのが一般的であった。本章では、信仰対象以外にマウル信仰の名称、時期、祭祀の方法によって、西海地域のマウル信仰を類型的に分析してみたい。

1) マウル信仰の名称

西海地域において執り行われるマウル信仰の名称は、豊漁祭、堂祭、堂クッ、大同クッ、都堂クッ、堂告祀などがある。いつからその名称で呼ばれているのかも正確ではないので、名称によって類型化することは難しい。また同じ地域、同じ村においてもマウル信仰は様々な名称で呼ばれる。

これを前提として、マウル信仰の名称を分類してみると、まず最も多く、地域的に広く分布しているのが「豊漁祭」という名称である。「豊漁祭」が一番多い理由は、海という自然環境のなかで、漁業を中心に生業をしているためである。つまり文字通り、漁民が豊漁を願い祈る祭祀であるため、「豊漁祭」という名称が多いといえる。ただし、「豊漁祭」という名前は文化財指定と関係する面もある。全国的に漁村で執り行われているマウル信仰の中で、文化財指定されているものは「豊漁祭」と呼ばれることが多い。例えば、黄島里の鵬旗豊漁祭、古垈里のアンソム豊漁祭(クッ)、大明豊漁祭などはその代表である。学術用語としても用いられ、民俗学の論文・報告書においてもよく使用される。

「豊漁祭」の次に多い名称としては、「堂祭」という名称がある。これは、一般的に堂ジブ(ジブは家・建物の意)という祭堂で行われる祭祀である。現在は「豊漁祭」という名称があっても過去には「堂祭」という名称で呼んでいたという話をよく聞かされた。また「堂祭」は漁業だけではなく、農業をしている内陸地域でも多く使われる名称である。

そして「堂クッ」はムーダンが主管するマウル信仰の名称である。「堂クッ」では、巫俗的な祭

祀形式が多く残っており、部分的に儒教式の形式が混在して現れることもある。

2) マウル信仰の時期

西海地域のマウル信仰の時期は、そのほとんどが旧正月に集中している。より詳細に分類すれば、正月初め・正月十五日・2月初めという三つの時期に分けられる。これに関して朴桂弘^{パクゲホン}は、全国117の堂祭の調査から堂祭日が正月十五日に集中していることを明らかにし、その理由を満月の光と象徴性のためであると主張した⁽¹⁹⁾。西海地域の祭日に関する既存の研究成果から分析してみると、やはり旧正月が一番多いが、これは西海地域の漁業と関係があるといえる。つまり、主生業である漁業は、難破や転覆などの危険性が常時散在しているために、マウル信仰を執り行い、神に一年間の安全を祈願する。そのための最も適切な時期が正月なのであろう。これは、農村地域で主に10月に収穫感謝の意味で行う儀礼とは異なっている。

3) マウル信仰の祭祀方法

河孝吉はマウル信仰の祭祀方法について、「儒教式形態」と「クッノリ式形態」に分けられると主張している。筆者も西海地域の祭祀方法を同様に分類できると考える。しかし西海地域を沿岸地域と島嶼地域に分けてみると、もっと詳細に分類することができる。つまり、沿岸から離れている島嶼地域の場合、本来は「儒教式形態」であった。あるいはムーダンを呼んで祭祀をする「クッノリ式形態」であったが、「儒教式形態」に変化したと考えられる。しかし沿岸地域の場合、ムーダンを呼ぶことが島嶼地域より難しくないため、「クッノリ式形態」が多い。また全体的には、「儒教式形態」と「クッノリ式形態」が結合している事例が多い。そうすると、本来の形態はどのようなものが多かったのか、また「儒教式形態」と「クッノリ式形態」はどのようなきっかけで結合したのかという疑問がある。

この点について、朴昊遠^{パクホウォン}は儒教式と巫俗式（クッノリ式）とを区分する方法を次のように説明している。儒教式では、祭官が焚香（祭祀の時に香を焚くこと）・献酌（祭祀の時献杯すること）・読祝（祝文や祭文を読むこと）などを行う。巫俗式は、ムーダンによって歌舞中心に行われる。1937年に刊行された『部落祭』⁽²⁰⁾をみると、儒教式が約70%、混合式が20%、巫俗式が10%であった⁽²¹⁾。このようなマウル信仰の儒教化について、朴昊遠は朝鮮後期の邑祭（山神祭を国ではなく邑あるいはマウルが中心になって祀る）の影響があったと推測した。ここで注目すべき点は、なぜ西海地域のマウル信仰には巫俗式あるいはクッノリ式形態が多いのかである。この理由については、次章で詳しく検討してみたい。

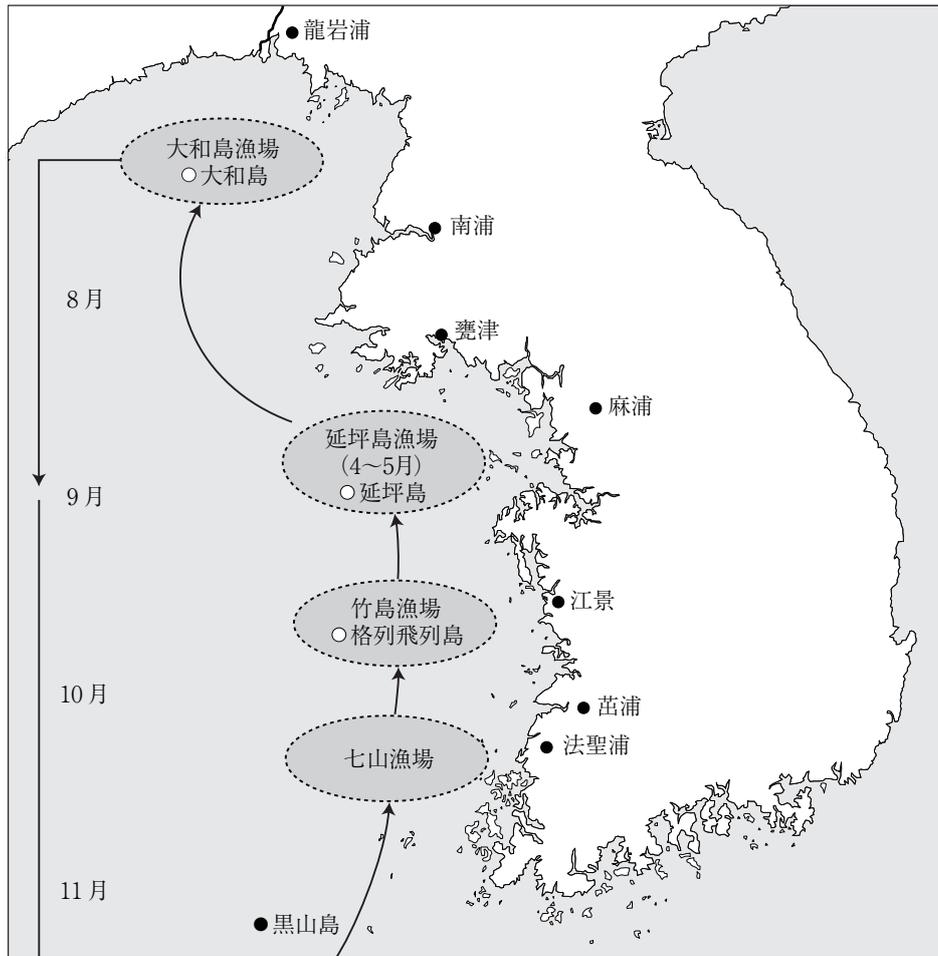
5. 西海地域のマウル信仰の特徴

マウル信仰の原形を把握することは難しい。マウル信仰の伝承様相を明らかにするためには、調査地域の通時的な観察が必要であり、村の歴史・構造・人々の生活とその変化、文化的な要素などを総合的に分析しなければいけない。しかし、実際にそのように長期間の調査を行うことは難しい。本章では部分的ながらも、筆者が現地調査を行って得られた結果を中心に西海地域のマウル信仰がどのような特徴をもっているのかを分析したい。

1) イシモチ漁に関連する神（林慶業将軍）

西海地域はイシモチが豊富な漁場として有名であった。図2のように、イシモチが北上するの

図2 西海地域のイシモチ漁場



にあわせて、イシモチ漁場は形成される。これはマウル信仰にも影響を与え、イシモチ漁に関する神が形成された。いつからかは明確ではないが、西海地域を中心に京畿道と忠清南道の一部の地域では、林慶業將軍が村の神として神格化されている。林慶業將軍は、朝鮮時代の名将であり、その靈廟は忠清北道忠州市の忠烈祠にある。この林慶業將軍は延坪島をはじめ西海一部地域に豊漁を祈願する生業神として祭られるようになった。

この林慶業將軍が村の主神として祀られた理由は2つある。まず林慶業將軍を主神として祀ってからイシモチがよく獲れるようになったとする説である。またもう一つの説は、金錦花氏（ムードン）を含めて黄海道のムードンが北から南に来たときに、彼らが祀っていた林慶業將軍が主神になったという説である⁽²²⁾。林慶業將軍が村の神になった過程については今後の課題とするが、西海地域では、一般的に林慶業將軍が多く祀られているのが特徴である。

2) キリスト教の流入による伝承の断絶

韓国の京畿道中部地域（江華島、甕津郡、仁川市）におけるマウル信仰の伝承は、他の地域に比して薄い。その理由は、韓国へのキリスト教の流入である。19世紀、韓国にキリスト教が流入し、キリスト教徒たちが弾圧を恐れて避難したのが京畿道一帯の島々である。いくつかの島では、聖堂や教会を建築し、村の住民たちに宣教した。その過程でマウル信仰は迷信とされるようになり、その伝承が断絶したところもあった。仁川広域市甕津郡の長峯島、茅島、矢島の場合がそれである。この島には、築100年以上の教会や聖堂が多くあり、村の住民はマウル信仰について迷

信と考えている事が多かった。

3) マウル信仰から個人信仰につながる信仰（船告祀、竜王祭）

ほとんどの地域がそうであるように、マウル信仰終了後、個人の信仰（家神の祭祀）が行われる。その理由は、村の神が最も大事な神であると考えられているためである。その順序は、西海地域においても現れている。ただし、祭堂において共同でマウル信仰を終えた後は、それぞれの船告祀を執り行う。つまり、内陸地域ではマウル信仰は集団儀礼、個人信仰は家神の祭祀とされる。一方、西海地域では、個人の信仰は家だけではなく、船においても行われることがある。この事例は、黄島の船旗競争や吉紙をムダンから貰うことにも見られる。また孝子島のマウル信仰においては、船主が船旗を持って堂山に登ることで、神の福を受けるといわれる。さらには、村に堂がある島では船主が必ず簡単な祭祀を執り行い、豊漁や安全を祈願する。このように個人の信仰につながる場合には、通常の村の祭りが終わったらすぐに船告祀を行う。この船告祀は、船主（男性）が主に行う個人の信仰である。

一方、竜王祭⁽²³⁾（ヨンワンジェ）は、漁に出た夫の安全を祈願するために、妻が簡単な供物を準備して、海辺で執り行う儀礼である。個人の信仰としての竜王祭もマウル信仰の後に行う。これも村の神を祀った後、個人が望むことを祈願するという順序である。つまり、まずマウル信仰（堂祭）を行ってから、次に個人の信仰（船告祀、竜王祭）を行うことが西海地域の特徴と見ることができる。

4) 儒教と巫俗の習合

現在、西海地域で行われているマウル信仰の形態は、巫俗式（クッノリ式）形態が多い。しかし、祭祀の方法の類型が『部落祭』での分布からも分かるように、儒教式がはるかに多いということには、どのような理由があるのか。この疑問に対し1920～1930年に調査された『部落祭』と、1950年代初頭の朝鮮戦争、そして現在という3つの時期を中心に記述する。

『部落祭』の調査がなされた時点では、儒教式形態が多かった。それでは、いつから巫俗式形態への変化がおこり、どのようなきっかけで変化がおこったのか。それについては、1950年初頭の朝鮮戦争以降、韓国にきた金錦花氏が重要な人物であるとみられる。金錦花氏は西海岸大同クッで韓国文化財庁より重要無形文化財に指定されている人物である。黄海道延白郡^{ヨンベクグン}の出身で、17歳でネリムクッを受けてムダンに入門し、1985年に重要無形文化財に指定された豊漁祭のペヨンシンクットと大同クッを主管している。西海岸の大同クッでは、大同会議を行い、村の人々が相談して祭官を決め、祭祀決算などがなされる。ここで注目すべき点は、大同会議、祭官選出、祭祀決算などが儒教式の祭祀の方法だということである。時期的には明確ではないが、少なくとも、この80年以上の間に巫俗の影響により、儒教式の伝承が巫俗式の伝承と習合したと考えられる。

5) 豊漁ということばの意味の弱化

豊漁祭と呼ばれる理由は、出漁した船の豊漁を祈願するという意味が祭祀に込められているためである。昔からイシモチ漁場、黄金の漁場と呼ばれる西海地域では、豊漁の祈願こそがマウル信仰の主目的であった。しかし、現在では漁船が減少し、漁業の規模も小さくなり、以前ほど豊漁についての祈願を重要視しなくなった。このような生業の変化は、マウル信仰の継承力に影響を与えたと考えられる。つまり実質的には、豊漁を祈願するという意味も多少弱くなっている。その例として、黄島では、漁民がほとんどいないにもかかわらず、黄島鵬旗豊漁祭という名称で伝承されてい

ることが挙げられる。豊漁ということばの意味の弱化は、マウル信仰の継承力とも密接な関係を持っている。つまり、生業と結びついたマウル信仰では、生業の変化により、伝承を継承する母体も変化し、本来あった「豊漁」の意味が弱化しているのである。

6. おわりに

以上、各章にわたって西海地域のマウル信仰の事例と類型、そして特徴について見てきた。もちろん、西海地域だけの特徴であるとはいえない部分もある。例えば、キリスト教流入による継承力の弱化の問題や、豊漁ということばの意味の弱化といった特徴は、単に西海地域の特徴ではなく、東海、南海地域など、他の地域にも存在する特徴である。これらの問題を解決するために、今後の研究課題を提示することで結論に代えたい。

西海地域のマウル信仰に関する先行研究は、大きく地域別の研究とテーマ別の研究に分けて見ることができる。これらの研究において重要視されたのは、マウル信仰の継承力と持続性である。すなわち、現在のマウル信仰の伝承主体が高齢化し、マウル信仰自体が消滅していく場合がある。このような変化、消滅の段階にあるマウル信仰に関する研究は、将来的に博物館でしか見られなくなり、昔話として聞くことしかできなくなるかもしれない。

そのために、筆者はここでマウル信仰の研究方法についていくつかの提言をしてみたい。まず島嶼地域の詳細な研究を行うことの必要性である。現在西海地域の島嶼地域についての研究は進められているが、その地域は行政村に限定されている。すなわち、複数の島や村をより広い視点で見る研究が必要である。

さらに、既存の研究を綿密に検討し、海というテーマに含まれている民俗文化の要素がどのようにマウル信仰と融合し、村の中で、どのような影響力を持っているかということについて研究する必要がある。例えば、西海地域におけるマウル信仰を研究するためには、西海地域の生業圏と関わる経済的な生活領域についての文化的なアプローチが先行されるべきである。

また、内陸と沿岸の比較研究も大きな重要性を持っている。これまでもいくつかの研究が発表されてきたが、ほとんどの場合、内陸と沿岸は区別されていた。しかし、内陸と沿岸、島嶼の間には常に文化的な交流が存在するのであり、それを把握したうえで互いの文化が交差する点を捉えることができるはずである。

注

- (1) 韓国の民俗学では「マウル信仰」という名称が広く受け入れられているものの、この名称に関しては、学界において何度も議論された。本稿では現在の一般的な意味として「マウル信仰」という名称を使用する。
- (2) 崔仁鶴編著の『韓国民俗学文献総目録：1920～1995』（仁荷大出版部、1999、pp. 139～212）をみると、「4. 儀礼民俗」では「民間信仰、巫俗、呪術、占い、俗信、その他」に分類されており、巫俗を含まない研究より、巫俗についての研究が多いことがわかる。そして韓国民俗学会が出版した『韓国民俗学叢書』をみると、民俗学は10種類に分類されており、その中で巫俗信仰の論文は25本、村の信仰は18本である。この点からみても、巫俗研究の多さが分かる。
- (3) 金宗大は、村の信仰の研究意義に関して次のように述べている。
「民俗という文化的な属性についての関心は、自己文化の内面を確認するための根本の探究である。このような根本の探究は、個人的な属性を持つ分野より、集団性がある文化を通じて理解するのがより効果的であるといえる。村の信仰もそのような点で、我々が知るべき重要な対象の一つである」（金宗大、『韓半島中部地方の民間信仰』、民俗苑、2004、p. 33）

- (4) 中国の黄河によって運ばれた黄土のために海水が常に黄色にみえるため、黄海とも呼ばれている。
- (5) 黄縷詩、「洞神信仰の研究」、『韓国民俗研究史』、知識産業社、1994。
- (6) 文化財管理局、『韓国民俗総合調査報告書—豊漁祭篇』、1982、p. 177。
- (7) 文化財管理局、『韓国民俗総合調査報告書—豊漁祭篇』、1982、p. 205。
- (8) 国立民俗博物館、『韓国の村の祭堂：第1巻 ソウル・京畿道篇』、1995。
国立民俗博物館、『韓国の村の祭堂：第3巻 忠清南道篇』、1998。
国立民俗博物館、『韓国の村の祭堂：第5巻 全羅北道篇』、2001。
国立民俗博物館、『韓国の村の祭堂：第6巻 全羅北道・済州道篇』、2002。
- (9) 国立民俗博物館、『漁村の民俗誌』、1996。
- (10) 忠清南道・韓南大学校忠清文化研究所、『島嶼誌』中、1997。
- (11) 海洋水産部、『韓国の海洋文化-2、西海海域(下)』、クン企画、2001。
- (12) 河孝吉、「西海岸地方の豊漁祭の形態と特徴」、『中央民俗学』3号、中央大学韓国民俗学研究所、1991、p. 331。
- (13) 河孝吉、『韓国の豊漁祭』、大圓社、1998、pp. 20~22。
- (14) 薛盛璟、「西海岸の漁業民俗からみる林將軍神」、『畿甸文化』16輯、仁川教育大学畿甸文化研究所、1987、p. 57。
- (15) 朱剛玄、「西海岸イシモチ獲りと漁業生産風習」、『歴史民俗学』1、1991、pp. 60~62。
- (16) 金宗大、「忠清南道海岸地方の堂祭の種類と特徴」、『韓国民間信仰の実体と伝承』、民俗苑、1999。
- (17) 金錦花(김금화)氏は西海岸豊漁祭の技・芸能保有者として、重要無形文化財第82-ナ号に指定されている。
- (18) 新羅時代の第56代目の王で、村の神として仰がれた人物神。
- (19) 朴桂弘、「堂祭の祭日について」、『韓国文化人類学』17輯、1985、pp. 189~190。
- (20) 村山智順、『部落祭』、朝鮮總督府、1937。
- (21) 朴昊遠、「韓国共同体信仰の歴史的研究」、『韓国精神文化研究院博士学位論文』、1997、pp. 304~306。
- (22) 黄島と牛音島の場合、元々は林慶業將軍を祀っておらず、金錦花氏が来てから祀るようになったという。
- (23) 竜王祭の沿岸地域と内陸地域を比較してみると、表1の通りである。

表1 竜王祭の地域比較

	内 陸	沿 岸
場 所	井戸	海辺
目 的	用水問題、家庭安全	船の安全と豊漁

参考文献

〔報告書〕

- 국립민속박물관, 『한국의마을제당 - 제1권서울, 경기편』、1995。
- 국립민속박물관, 『한국의마을제당 - 제3권충남편』、1998。
- 국립민속박물관, 『어촌민속지』、1996。
- 문화재관리국, 『한국민속종합조사보고서 - 豊漁祭篇』、1982。
- 충청남도. 한남대학교충청문화연구소, 『島嶼誌』中、1997。
- 해양수산부, 『한국의해양문화-2. 서해해역(下)』、도서출판사큰기획、2001。

〔論文〕

- 김중대, 「충남해안지방동제의유형과특징」、『한국민간신앙의실체와전승』、민속원、1999。
- 김중대, 『한반도중부지방의민간신앙』、민속원、2004。
- 박계홍, 「堂祭의祭日에대하여」、『한국문화인류학』17집、1985。
- 박호원, 「한국공동체신앙의역사적연구」、『한국정신문화연구원박사학위논문』、1997。
- 설성경, 「서해안 漁業民俗에나타난林將軍神」、『기전문화 16집』、인천교육대、1987。
- 주강현, 「서해안조기잡이와어업생산풍습」、『역사민속학』1、1991、pp. 60~62。
- 최인학 編著 『韓國民俗學文獻總目錄：1920~1995』、仁荷大學校 出版部、1999。
- 하효길, 『한국의풍어제』、대원사、1998。
- 하효길, 「서해안지방풍어제의형태와특징 - 특히위도지역을중심으로」、『중앙민속학 3호』、중앙대한국민속학연구소、1991。
- 황루시, 「洞神信仰 研究」、『한국민속연구사』、지식산업사、1994。